

人文会ニュース

jinbunkai news

December 2018

NO. 130

1 図書館レポート

大学図書館に求められる役割

—— 武庫川女子大学附属図書館の取り組みから

川崎安子

13 書店現場から

ハイブリッド型総合書店 honto

松原嘉哉

19 「15分で読む」一覧

23 編集者が語るこの叢書・このシリーズ ¹⁴

『シリーズ 精神医学の哲学』（全三巻）とその背景

住田朋久

2018年研修旅行報告

2018年特約店グループ訪問報告



www.jinbunkai.com

建設現場

坂口恭平 これは小説なのか？ 見たことのない世界をリスミカルに体感させ、新次元をひらく書き下ろし長編 三〇〇円

統合失調症とトラウマ

「統合失調症の経過と看護」「今にして戦争と平和」「踏み越えについて」「身体の多重性」など二八編を収録 三〇〇円 中井久夫集 8

農家が消える

自然資源経済論からの提言 寺西・石田・山下編著 持続可能な地域・農業・食料・エネルギー利用から、アジアと連携する環境共同構想へ 三〇〇円

メトロポリタン歌劇場

アフロン 舞台の上に生まれる奇跡の時間の陰で、芸術と政治が織りなしてきた一三〇年のドラマ。佐藤宏子訳 八〇〇円

みすず書房 (税別)

東京文京本郷2-20-7 www.ms2.co.jp

高木仁三郎 反原子力文選

核化学者の市民科学者への道

編者=佐々木力

編集協力者=高木久仁子+西尾漢

反原発の思想家・運動家として知られる高木仁三郎の反原子力にかんする主要な論考を厳選し、再編集して収載する。高木仁三郎思想のすべてが凝縮された一冊。4200円

加藤尚武著作集

全15巻

第3巻 (第7回配本)

ヘーゲルの社会哲学 5800円

第1巻	ヘーゲル哲学のなりたち	5800円
第2巻	ヘーゲルの思考法	6800円
第4巻	よみがえるヘーゲル哲学	5800円
第6巻	倫理学の基礎	5800円
第9巻	生命倫理学	5800円
第13巻	形と美	6800円

既刊本



未来社

〒112-0002 東京都文京区小石川3-7-2

TEL03-3814-5521 FAX03-3814-5596

http://www.miraisha.co.jp/ ※表示は税別

評伝 小室直樹 (上・下)

◆上巻 学問と酒と猫を愛した過激な天才

◆下巻 現実はやがて私に迫りつくであろう

村上篤直著 今まで多く語られることがなかった生涯をインタビューと資料から描き、人生のすべてを学問のために献げた小室直樹の足跡をたどる。

* 四六判・上製・平均750頁 各巻本体2400円

小室直樹の世界

社会科学の復興をめざして

橋爪大三郎編著 伝説の小室ゼミ、そのアカデミズムの神髄。* 四六判・上製・524頁 本体2500円

ミネルヴァ書房

京都市山科区日ノ岡堤谷町1

TEL075-581-0296 価格税別

「東京オリンピック」の誕生

一九四〇年から二〇二〇年へ

浜田幸絵著 3800円

聖火リレー・競技場・テレビ・オリンピック教育：「国際」と「グローバル」をキーワードに連続性を読み解く。(僅少)

植民地遊廓

日本の軍隊と朝鮮半島

金富子・金栄著 3800円

公娼制がなかった朝鮮にいかにも日本式遊廓が移植されたか。

考証 東京裁判

戦争と戦後を読み解く

宇田川幸大著 (歴史文化ライブラリー) 1700円
判決から七〇年。何が裁かれ、何が裁かれなかったのか？

吉川弘文館 東京都文京区本郷7-2
TEL03-3813-9151 税別

大学図書館に求められる役割——武庫川女子大学附属図書館の取り組みから

川崎 安子（武庫川女子大学附属図書館 図書課長）

はじめに

仕事柄、「女子大学の存在意義とは？」と問われる機会が多い。日本国内に七八〇校ある大学のうち、約一割が女子大学であることを知る方は少ないだろう。主な大
学入学年齢となる一八歳人口が二〇一八年を境にさらに減少していく「二〇一八年問題」は、我々大学関係者にとって危機的状況を呈しており、少子化による大学淘汰の波をいかにして回避するか、どの大学も生き残りをかけて必死だ。平成年間だけでも、統合・共学化に踏み切った女子大学は三十八校に上る。

来年に創立八十周年を迎える武庫川女子大学は、学生

数約一万人を有する国内最大の女子総合大学である。総体としては定員割れを免れつつ、これだけの数の女子学生を抱える現状を見ると、まだ女子大学の需要は失われていないと考えている。ましてや東京医科大学の入試における女性差別のニュースや、男女雇用機会均等法が改正されてもおお、性別を理由に女性が不利益を被る場面が見られる日常を思えば、まだまだ女子大学の存在意義は大きい。学力だけではない確かな人間力を育てるための高等教育機関として、大学は社会からの信頼と負託に応える必要がある。そのために大学図書館が果たすべき役割とは何か？ 常にこの問いを念頭に置きながら自大学の図書館を運営してきた。

中央図書館の改修

武庫川女子大学附属図書館は、中央図書館、薬学分館、甲子園会館分室の三館・室から成る。蔵書冊数は約六十八万冊、年間入館者数は約四十六万人、授業開講期の一日平均が約二千人で、繁忙期になると四千人が利用する。協調学習や問題発見・課題解決型学習といった、今の時代に応じたより快適な学習環境を整えるべく、本学では二〇一二年度を「情報教育研究環境の改革元年」と位置付け、教育の質の向上、研究力の進展、国際化への取り組みを目指し、基盤となる施設・設備の整備計画が示された。その先鞭をつけて中央図書館を改修、翌二〇一三年十一月にリニューアルオープンした。今ではキャンパス内で最も賑わいを見せる施設となっている。

近年、国内ではラーニングコモンズと称される学習の場が相次いで設置されており、いわゆるアクティブラーニングを展開するためのエリアとして、キャンパス内に設ける大学が急増している。それは必ずしも図書館内にあるわけではないが、学習支援の観点で考えるなら、同

じ空間に図書や雑誌、様々なメディアが存在し、すぐにアクセスできる環境の方が教育的効果は高いだろう。本学の中央図書館ができたのは一九九三年で、十三階まである図書館棟のうち、地下一階から地上六階の七フロアが図書館として機能している。改修では、四フロアを設計変更してラーニングコモンズを設置し、残り三フロアについても全資料を再配置した。コンセプトは「何度でも通いたくなる図書館、いつまでも滞在したい図書館」である。改修前までは飲食はもちろん、おしゃべりもスマホの充電も禁じていたが、滞在型図書館を標榜しながら何もできないのでは不都合極まりない。そこで発想の転換をし、話し合いながら学習ができて飲食も可能なゾーン、充電ができる閲覧席、そしてサイレント・ゾーンと、ゾーニングを明確にして、多様な目的に対応した館内構成に注力した。最も心を砕いたのは「学生目線」であることだ。

読書に関わるアンケート調査

学生目線を貫くことに关しては、毎年実施している

「読書に関わるアンケート調査」の結果をもとに、学生からの要望を可能な限り吸い上げ実現させた。この調査は図書館運営の評価指標として活用すべく、全学生を対象にしたウェブ・アンケートである。図書館に対する満足度調査であるとともに、学生の読書傾向を把握する目的もあるため、毎日新聞社が毎年行っている「読書世論調査」を参考に設問している。今年度で七回目となるが、概ね全国平均値と同じような傾向が見られる。まず、読書習慣の有無の二極化が激しい。好んで読むジャンルは圧倒的に日本の小説が多く、読書に長時間費やすというよりは浅く、娯楽の一つとして捉えている学生が多い。反して、インターネットを利用する時間が際立って長い点が特徴として表れている。

今年二月、全国大学生生活協同組合連合会が発表した「学生生活実態調査」で、一日の読書時間がゼロと回答した大学生が五十三%に達したとの結果は至るところで話題となったが、現場感覚としては既知の事実であり、特に大学図書館で扱う学術書になると学生による自発的な活用は、授業の課題やレポート作成など必要に迫られた最小限の利用にとどまっていた。これらの背景をふま

え、読書習慣のない学生を本好きに転換させることを第一義に、ライトノベルから脱却して学術書に親しむ楽しさを伝えることを企図して、魅力的な図書館づくりに向けた挑戦が始まった。

学生協働の取り組み

協調学習や問題発見・課題解決型学習が推奨される流れの中で、学生同士あるいは学生と教職員が協力し合い、同じ目的を達成するために共に活動する「学生協働」がトレンドとなっている。大学図書館においては、ブックハンティングや資料の装備、配架、見学者への施設案内、カウンター業務などの伝統的な図書館業務を学生がサポートする以外に、各種ICT機器の操作案内や下級生への学習指導、広報活動などの役割を担う。ボランティアで活動する場合もあるし、アルバイト雇用やインターシップの枠組みで従事する場合もあり、各大学によってやり方は様々だ。二〇〇九年度より本学でも活動を希望する学生を募り、学術書の見計らい選書、ポップ作成、図書館主催の集会活動の応援といった業務を協力

してもらっていた。最初期は業務ごとに図書カードを進呈、時にはアルバイト料を支払ったりしていたが、ピーク時で一二〇名を超える学生サポーターが存在し、彼女たちのシフト管理だけでも大変な状況に陥ってしまった。このとき、私たち図書館員が失敗したのは、自律的に活動できるように学生たちを「育てる」意識が完全に欠如していたことにある。作業内容を指示して実行してもらうだけではとても学生協働とは言えず、終始受け身であつた学生たちも十分な達成感が得られなかったに違いない。あまりに過保護だつた姿勢を反省し、中央図書館の改修を契機に、図書館を学びの場として存分に活用してもらうため、インターンシップを意識した課題解決型の活動へと大きく方向転換した。

二〇一三年、Student Staff for Library Commons ≡ S S L C という名の学生集団を形成し、①ライブラリー・カフェの運営、②利用案内、企画展示、イベントの開催、③七十五周年誌『MUKO B O N !』の編集・発行の三部門を立ち上げて活動を開始した。いずれの部門も期限を定め、必ずその道の専門家に指導してもらいながら、最終的に何らかの成果物を生み出すという方針のもと、

司書は相談役として図書館の資源を最大限に活用するためのアドバイスと、実現に向けた協力体制の確立に尽力した。

ライブラリー・カフェの運営

欧米の大学では二十四時間開館している図書館は珍しくなく、長時間滞在する利用者のために館内や隣接する場所にカフェや売店を併設しているところが多い。滞在型図書館を目指す本学としても飲食やおしゃべりが可能なエリアが必要であろうと考え、図書館の一階にライブラリー・カフェを設置した(写真1)。珈琲関連商品の輸入販売とカフェ・コンサルティングを展開している地元の特約店に入ってもらい、バリスタによる事前レクチャーや広報宣伝用のビジュアル制作、カフェ内イベントの企画、顧客満足度を測定するアンケート調査など、起業セミナーしながらに学生たちは次々にチャレンジしていった。カフェの営業時間には学生アルバイトを採用し、学内雇用の創出にも寄与している。さらには教員からの申し入れにより、卒業研究を「女子大生に好まれる



写真1 ライブラリー・カフェ

スペシャルティコーヒーの開発」というテーマにして取り組んだゼミも誕生した。

アルバイト中に学生がかかるエプロンと図書館の司書スタッフが着用するユニフォームも、アパレルコースを専攻する学生たちと一緒に老舗百貨店のパタンナーの指導を受けながら制作した。採寸の際には、司書が平生どのような仕事をし、どのような動き方をするのかまで詳細なヒアリングを受け、想像以上に肉体労働が多いと知って目を丸くしていた学生の様子が何とも微笑ましかった。

カフェ内には学生からのリクエストが多い一般雑誌やベストセラー文庫コーナーを配している。入館目的がコーヒー一杯やランチであったとしても、すぐそばに本があり、読書習慣のない学生が思わず手に取ってしまうような環境を意図的に提供している。本好きにさせるための大事な一歩だ。

共催・巡回企画展示

大学図書館だけに限らず公共図書館でも、何らかの企

画展示や季節ごとの棚づくりは小まめに実践している。本学でも十テーマほどの特別コーナーを常時展示しているが、ただ書架に並んでいるだけでは決して注目されないような本も、面出しをしてお薦めポップを添えるだけで即座に借り手がつく。そこで常設コーナーに加えて特別展示として、他館と共催する巡回企画展示を実施することにした。

初めての共催相手は大阪市にある一般財団法人アジア図書館で、各国語に翻訳された日本の絵本を中心に三八〇冊を集めた絵本展を開催した。資料の選択、借入リストの作成、梱包、パネル・紹介文の制作など、学生たちは連日遅くまで準備に奮闘し、子どもたちにこそ見てもらいたいと、附属幼稚園の園児を招いて初日を迎えた。お姉さん然と振る舞う彼女たちの様子は何とも頼もしく、大盛況の特別展示となった。この成功で弾みがつき、図書館の活動の柱の一つとしてMLA連携*を進めていく体制づくりが整えられていく。以降、兵庫教育大学教材文化資料館の「夢と青春の修学旅行」展・「ノート指導」展、千代田区立千代田図書館の「二大書評紙」展など、毎回素晴らしい特別展示を企画されてい

る館との共催・巡回展示が実現し、楽しみながら資料を閲覧できるミュージアム空間を図書館で提供できるようになった。

他方、隣接する芦屋市に芦屋市谷崎潤一郎記念館という文学館があり、読売新聞大阪本社、大阪よみうり文化センター、中央公論新社と本学の四者が指定管理者となり運営している。芦屋市としては若い世代の入館者数をもっと増やしたいという希望がある中、十代の若者たちに人気の『文豪ストレイドッグス』(朝霧カフカ原作、KADOKAWA)とのコラボ企画の話が持ち上がり、限定グッズの製作に本学の学生が関わることになった。二〇一六年に第一弾を開催し、前年度の年間入館者数を凌駕する数の若い世代が来場したと聞く。好評を博して毎年の開催となり、今年で三回目を迎える。意外にも、この経験を機に谷崎潤一郎の作品を読むようになったという学生が続出し、図書館内でも谷崎コーナーを設けるまでに至った。

*ミュージアム(Museum)、図書館(Library)、文書館(Archives)による連携のこと。

本の制作

朝日新聞出版の『AERA大学ムック』シリーズを初めて読んだときは大学広報誌の変容に驚嘆したが、一方で自費出版する個人が増えたというニュースを見聞きして、それなら図書館でも本を作れるだろうと確信し、公募で選んだ十四名の学生と創立七十五周年誌を作るこ



写真2 『MUKO BON!』(2015年)表紙

とになった。プロの編集者、記者、イラストレーター、印刷業者の指導を受けながら取材と執筆・校正を重ね、ようやく完成したのが『MUKO BON!』である(写真2)。史実確認や文章表現の技術、配色レイアウトを学ぶ際には図書館の資料も紹介して活用しつつ、約八か月間を経て作り上げた。学生にとっては曾祖母の年代にあたる大学一期生との語らいでは、創立当時や戦中戦後の大学の様子を伺い、繰り返してはならない戦争の歴史を心に刻んだ。阪神・淡路大震災で犠牲となった学生のご遺族ともお会いし、風化させてはいけない震災の記憶と、後世まで語り継いでいく大切さと使命を学び、私たち図書館員も身の引き締まる思いがした。『MUKO BON!』の出来栄は上々で特に卒業生から絶賛され、八十周年誌もまた学生たちと作る運びとなった。今度は共通教育科目の授業に組み込まれ、来年発行される予定である。

同じく共通教育科目の中に、現代美術作家の方が講師となつて手づくり仕かけ絵本の指導を行う「未来造形」という授業がある。ストーリーの発案から製本に至るまで、履修生個々人が一冊の絵本を作り上げる。期末には

図書館内で作品展を開催し、本人たちの許諾が取れた作品は、世界に一冊だけの資料として受け入れ、専用の絵本コーナーで閲覧できる。作者である学生の名前で蔵書検索をすればヒットするので、各々ちょっとした作家気分を味わうことができ、非常に喜ばれている。このような活動が続ける中で、いつかプロの絵本作家が育つようにと願っていたところ、「be絵本大賞」で大賞を獲得した卒業生絵本作家が誕生し、図書館員全員で歓喜した。すぐに受賞者のありま三なこさんに連絡を取り、受賞記念の原画展を開催した。彼女が絵本に魅せられたきっかけはロバート・サブダの立体しかけ絵本だったと言う。図書館が作家を育てる土壌になり得ると確信できた体験となった。

出版社との連携

これまで直接関わるものが少なかった出版社との連携がとても楽しい。実際に本づくりの苦労を知って改めて、出版業の奥深さと編集者の知識熟達ぶりに感銘を受ける毎日だ。大学図書館の司書である限り、良質な学術書と



写真3 書物復権コーナー

学生たちをつなげることが第一の使命であると痛感する。シラバスに掲載された教科書と参考書を揃えるだけでは駄目なのだ。

三年前、「書物復権の会」出版社十社の皆様とご一緒する機会があり、「本はどのように作られ、そして読者へ届くのか」というテーマで、本の企画から営業・販売までのリアルな現場を語っていただくトークイベントを主催した。東京ならいざ知らず、関西圏でこのような会が催されるチャンスは滅多にない。予想通り学生の参加者数は二五〇名と立ち見の出る大賑わいを見せ、本の編集に携わる仕事をしたいと願う学生から熱い質問が相次いだ。図書館としては、後代に読み継がれていくべき人文書を復刊するという書物復権の会の趣旨に大いに賛同し、館内に専用のコーナーを設けている(写真3)。面出しをして紹介すると明らかに利用率が向上した。学生に新たな知的発見を促せていると感じる。その後、出版社の皆様には毎年ご協力いただき、出版に関わるトークイベントを開催し続けている(写真4)。毎回、最大収容人数となる一八〇名を超える観覧申込みがあり、図書館にとって欠かせない集会活動となった。



写真4 出版協会とのトークイベント(2016年11月12日)

「なぜ、私たちはこんなにもこの仕事が好きなのか
——出版社が求める将来の人材・出版社が創り出す将来の読者」

その他、出版社六社からの提案による「世界のノンフィクションがおもしろい！」や、美術書出版会十社の企画「美術書フェア」など、各出版社ならではの知見を存分に頂戴しながら魅力的な棚づくりが展開できている。図書館司書課程の授業では、お勧め学術書のポップ作成を課題として提出させており、出版社が作成したポップは実例としても参考になっている。自身が心を込めて推薦した本が読者の手に渡る喜びを体感した学生は、きつと素敵な司書になるに違いない。

ライティング支援

欧米の大学図書館を訪問する度に羨ましいと思つてきた光景がある。図書館の中にライティング支援を行っている一画があり、「書くこと」を教えるサービスを提供していた。滞在先の言語を母語としない留学生や、アカデミックライティングの技法を学ぶ学生で予約はいっぱいだった。協調学習だの課題解決型学習だのと言っても、「読み、考え、書く」学習は基本中の基本である。しかしながら、授業で接する学生のレポートを見ると書く力

は著しく低下しており、誤字・脱字の程度が甚だしく、文章のつながりがおかしいので読んでいると頭痛が起きる。学生に尋ねると、授業でレポート課題は山ほど出るが、添削後に返却してもらつた場面がないので、成績評価を見て内容の出来・不出来は理解するものの、果たしてこの書き方で良いのか分からないまま過ごしてきたと言う。こうした現状を見聞きし、図書館の中でライティング支援を行うことは喫緊の課題だと感じていた。

時を同じくして、英語のライティング支援サービスを立ち上げたいと考えていた教員と意気投合し、外国語教育を支援する部署と協働して、二〇一六年度より「英語ライティング・プラザ」を開始した。英語の文章をネイティブ教員にチェックしてもらつたわけだが、授業や教員との連携を緊密にしている。例えば英語多読書のブックレビューを英語で書くという課題を出す際に、必ずライティング・プラザでチェックを受けてから提出させる、論文の英文抄録はライティング・プラザで承認を得る、といった流れで反強制的に利用を促している。学生の立場からすると面倒だろうが、結果として自分の書いた文章がアップグレードする様を見て嬉しくないわけがない。

この成功を受けて、翌年度からは日本語のライティング支援も実施できるようになった。外部委託講師を採用し、レポート・論文の提出時期と重なる一定期間に集中して開講している。学生からは、自信を持ってレポートを出せるようになったという声を多く聞く。昨今の大学教員は授業と研究以外にも様々な仕事を抱えて多忙なため、アカデミックライティングの指導を任せられるのは助かると教員からも喜ばれている。他大学では、図書館とは別にライティングセンターを設置して指導に当たっているケースもあるが、「読み、考え、書く」学習行動はワンストップで担える図書館の中で提供する方が断然望ましい。

MWU電子図書館

二〇一七年秋、「MWU電子図書館」をリリースした(写真5)。図書館の本のように、閲覧・貸出・予約・返却ができ、利用期限が来れば自動で返却されるので手間がかからない。通常、学術書の電子書籍を購入している大学は多いが、本学で提供しているコンテンツは内容が



写真5 「MWU電子図書館」トップページ

かなり異なる。一般的な読みもの、小説の類、あるいは資格関係の問題集や就活対策本など、本来であれば大学図書館で積極的に購入したくない本を電子書籍で提供している。これらは購入希望の上位に挙がってくる資料群でもあるので、学生からはすこぶる好評だ。合わせて、来年度から文学部教育学科を改組して教育学部を設置するため、教職を目指す学生のためのコンテンツを充実させた。具体的には、四十七都道府県全自治体の教員採用試験の過去問題集と、コアジャーナルとなる『教職課程』『教員養成セミナー』の電子版を独自資料として搭載している。教育学科と教職課程では必読文献として扱われているため、利用実績は今年度の上半期だけでも既に三六〇〇件の利用があった。この電子図書館システムはコンテンツのダウンロードやコピー&ペーストができないように組まれているので、リポトリで公開できない修士論文・卒業論文の搭載も可能にした。閲覧の時間帯を見ると、通学の途中や授業の空きコマなど隙間時間を狙って使っている様子が見える。

活字に強い女性の育成

以上、本学で取り組んでいる活動の一部をご紹介したが、これらの努力が実り、図書館の入館者数と貸出率は前年比一一〇%を維持して増加し続けている。学生協働と授業連携の相乗効果もたらした結果であるし、何より司書スタッフ全員が目標達成に向けて熱心に取り組んでくれているおかげである。

学生との付き合いは在学中の四年間だけではない。本学では卒業後も継続して大学図書館を利用できる。嬉しいことに、開館時間を二十一時三十分まで延長するようになってから、仕事を終えて来館する卒業生の数が格段に増えた。読書習慣を身につけた活字に強い女性の育成を目指すとともに、一生涯をかけて学び続ける女性を支えるために私たち武庫川女子大学附属図書館の司書は存在する。今後も時代のニーズに応えた当意即妙な図書館づくりを奮励していきたい。

—書店現場から—

ハイブリッド型総合書店 h o n t o

松原 嘉哉（大日本印刷株式会社 h o n t o ビジネス本部

ハイブリッド書店企画ユニット

ネット×書店ハイブリッドプロジェクトリーダー）

本は私のメンターだった。

半藤一利先生の『昭和史』（平凡社）では、退屈な事実の羅列と思っていた歴史が夜も眠れないくらいエキサイティングで壮大な人間ドラマだと気付かされた。また、仕事が少し上手く行きだしたと思うとコート・ドールの斉須政雄シェフの『調理場という戦場』（朝日出版社）を読んでいる。すると、自分の考えの甘さを嫌という程、思い知らされる。

そんな私の大好きな本の市場は、1995年から減少している。顧客に届きやすい、軽い情報がインターネット上に登場したことが一因と考える。特に、即時性が求められる雑誌市場は大きく打撃を受けた。だが、直近、その潮目が変わってきた。2016年末に大きな話題になったWELQ問題^{*}を例にあげるまでもなく、インターネット上に情報が溢れ、中には偽の情報も混じるようになり、顧客から見ても何を信頼してよいかわからなくなっているのだ。真のデジタルネイティブと言われるジェネレーションZ世代（1998～2016年生まれ）は、約54%が周りの知人やインフルエンサーなどの特定の個人の信頼に基づいた意思決定をしていると言う。本来、

本が得意とする「情報の重さ・深さ」の価値が見直されてきていると言えよう。

では、本屋は、これまでと同じように、インクが印刷された紙の束としての本、あるいは、その電子媒体を売る場に留まっていれば良いのだろうか。そうすれば、顧客はインターネットの情報を捨て、昔のように本屋に向かうのだろうか。

私はそうは思わない。

インターネットによる情報の流通性の高まりは、もはや前提事項だ。それを無視して、未来の本屋は語れない。それを前提として、如何に本が従来得意とする情報の重さ・深さを価値として顧客に再発見してもらうかが肝と捉えている。私の所属するハイブリッド型総合書店 honto は、インターネット上で電子書籍、及び紙の本を販売しつつ、丸善・ジュンク堂書店・文教堂などのリアル書店とサービスを密に連携しており、まさに時代が来たと感じている。本棚サービスや honto ポイントなど、顧客の行動履歴を統合することで購買／読書体験の利便性が高まるサービスの紹介は別の機会に譲るとして、本稿では、インターネットによる情報の流通性を活用した本の売り方について、直近の取り組みを三つ紹介した上で、今後のサービスの方向性について紹介する。

一つ目は、「本の在庫情報をインターネットの流通に乗せる」取り組みだ。honto の商品詳細ページ・購入カートから、各商品の全国の丸善・ジュンク堂書店・文教堂の在庫情報を確認できて、かつ、全国の丸善・ジュンク堂書店では店舗お受け取りも選択可能だ。お受け取りを希望すると、書店員が店舗の商品を取り置いてくれる。「自宅で受け取る時間がない」「通勤帰りに

すぐ持ち帰りたい」「外出時に確実に手に入れたい」「現物を見てから判断したい」などのニーズに応えたサービスであり、特にスマートフォン・アプリからの利用が増えて、2016年のサービス開始当初と比べ数倍の利用数になっている。更に興味深いのが、お受け取り利用者の多くが「ついで買い」をしていく傾向があることである。つまり、店舗お受け取りは、欲しい本の在庫情報をインターネット上で確認させることで店舗来店モチベーションを上げると共に、店舗での偶然の本との出会いまで提供していると言える。

二つ目は、電子書籍で「本そのものの価値をインターネットの流通に乗せる」取り組みだ。電子書籍の強みは、いつでも何処でも手に入ること、かつ、プライシングが柔軟なことだ。これらは、インターネットと非常に親和性が高い。昨年より、コミックの全巻無料キャンペーンを実施している。一巻だけ無料で、後が有料とかではない。全巻だ。我々の狙いは、インターネットの薄い情報に慣れているユーザを、コミック全巻一気読みという濃い体験に触れさせることだった。ベルサイユのばら全巻無料キャンペーンは、「懐かしい」という三十代の女性を中心にTwitterでの拡散がなされ、僅か5日間で13000人を超えるユーザにダウンロード頂いた。うち、4000人近くが、新規会員だった。そして、その後、新規会員の何割かに関連本を購入頂けた。電子書籍は、決して、紙の本の敵ではない。相性の良いインターネット、SNSの力を上手に活用し、本自体(紙の本・電子書籍)の価値を遠くに届けてくれる有効な武器であることが証明されたように思う。

三つ目は、「ヒトを成長させるような本のお勧めをインターネットの流通に乗せる」取り組みだ。ヒトを成長させるためには、そのヒトの興味関心に沿うこと（個別性）と、そのヒトの想像を超えること（意外性）の両立が重要と考える。インターネット書店でよく見る「この本を買ってるヒトはこの本も買ってます」は、読者の興味関心に沿った提案ではあるものの、同じ著者の新刊など、意外性が少ない提案であることが多い。一方、メディアでよく特集が組まれる「著名人のお勧め本」は、予想外の本がお勧めされており読み物として面白いものの、読者にとっては興味関心に沿った提案ではなく、読み流される可能性が高い。hontoブックツリーは、出版社の編集者から、直木賞作家や話題のミュージシャンまで本が好きなキュレーターを400人以上集め、独自の4500以上のテーマで5冊ずつ紹介記事を書いていただいている。ただし、本の専門家のお勧め本という意味で、質・量が、他社の著名人のお勧め本と比して、特段に優れていると思わない。我々の優位性は、hontoでの購買・閲覧履歴やデモグラフィック指標などあらゆるデータを使い、それらの記事をジャストインタイムに提案をする点にある。例えば、野村克也氏に「私が22歳で出会いたかった本」として5冊紹介頂いている。非常に限定されたテーマでの本のお勧めだが、自分の生き方に悩み、彼の本などを手に取っていたタイミングでこの記事を紹介されると、心の奥に刺さる可能性が高いのではないだろうか。元来リアル書店が得意であった商品提案の意外性をベースにしつつ、IT・インターネットを活用した個別性も担保することを狙っている（左図参照）。

ここまで、インターネットの流通性を活用し、本が従来得意とする情報の重さ・深さを顧客に



届ける三つの取り組みを紹介した。これからは、将来の話をしたい。今後、更に情報が軽くなる勢いは止まらないだろう。経営者の濃厚な体験に裏打ちされた人生訓、クリエイターの苦悩の果てに生み出された作品、これらはデジタルデータに変換され流通し、消費される。すると、誰もが、「物事を体感した、知った」風に錯覚してしまうだろう。本当は消費しているだけなのだが。そこで、重要なキーワードは「体験、身体性」だ。本の内容を議論したり実践する、編集者や著者からストーリーの背景を聞く、同じ趣味を持つユーザと話すなど、自分の身体を使って得た体験を提供することが、インターネットでもリアルでもこれからの本屋に求められていると思う。昨年より、hontoと丸善日本橋店で「日本橋BOOK CON」を開催した。本の作り手と読み手を本屋で繋ぐイベントだ。開店中の店舗に、3日間で120ものブースが並び、著者と読者が楽しそうに喋っており、各イベントがリアルタイムで動画配信された。その風景には、未来の本屋の可能性の一端を感じた。

以上、インターネットの流通性を活用した本屋の生き残り方や今後について、偉そうに述べさせて頂いた。が、全てをひっくり返すようで恐縮だが、これらよりもっともつと重要なことは、日々の新刊をきちんと並べることだ。インターネット書店だろうが、リアル書店だろうが、これを疎かにして、未来の本屋を語るなんておこがましい。だからこそ、身体性の欠けた錯覚だと思う。この基本が本屋の7



筆者近影

割を占めており、残りが先ほど述べたような差別化要素と思う。と、急に日々の業務の話に戻ってきたところで、ここらへんで筆を置きたいと思う。今日も、新刊を並べ、未来の本屋のあり方を企てることとする。

*デイー・エヌ・エーは、自身が運営するヘルスケア情報キューレーションサイト「WELQ(ウェルク)」内の医療情報の信頼性が問題視されたことを受けて、サイト内の全記事を非公開に踏み切った。それを契機とし、同社が運営する他のキューレーションサイトも次々に非公開化した。

松原 嘉哉(まつばら よしや)

「15分で読む」一覧

現在、『人文会ニュース』の柱の一つとなっている「15分で読む」は、1999年6月発行の84号から始まりました。85号に掲載の活動報告で当時の弘報委員長・吉田哲夫氏（未来社）は次のように述べています。

弘報委員会は、専門書の普及・販売を積極的に推進すると共に人文会の活動を皆様にご理解いただくために活動してきました。その主要な手段として、『人文会ニュース』を刊行してきました。年三回の刊行ですが、出版界を取り巻く様々な問題や潮流を的確に捉える記事を取り上げるような心がけています。また、書店様の実際の棚づくりの参考になるようなシリーズを企画しています。

その手始めは「一五分で読む○○」シリーズで、これは今年六月発行の『人文会ニュース』八四号からスタートしています。第一回目は、正木晃氏による「一五分で読む仏教の歴史」でした。

現在と変わらず、めまぐるしく変化する出版界に対応すべく始まった企画でした。必ずしも「15分で読む」という冠のつかないものもありましたが、お陰様で20年弱、斯界の一線で活躍さ

れる方に寄稿いただき、連載回数は30回を超えています。

今後も時代の趨勢を捉え、書店・図書館の現場で役に立つテーマをわかりやすく提供していきたいと考えています。

一五分で読む仏教の歴史	正木 晃	84号(1999年6月)
一五分で読む「歴史」	歴史書販売研究会	85号(1999年9月)
一五分で読む「臨床心理」	氏原 寛	86号(2000年1月)
一五分で読む生命倫理	加藤 尚武	87号(2000年7月)
一五分で読む現代思想	的場 昭弘	88号(2001年3月)
一五分で読む「福祉と介護」	川村 匡由	89号(2002年9月)
一五分で読むドイツ近現代史	望田 幸男	90号(2003年9月)
社会学への15分ツアー	大澤 真幸	96号(2005年8月)
一五分で読む「身体論」	鈴木 晶子	97号(2005年12月)
一五分で読む教育学	広田 照幸	98号(2006年4月)
心の哲学・心の科学への15分ツアー	河野 哲也	99号(2006年10月)
15分で読む「こころの臨床学」	皆藤 章	101号(2007年6月)
現代リベラリズムとは何であったか	盛山 和夫	102号(2007年12月)
十五分で分かる日本中世史	本郷 和人	103号(2008年5月)
15分で読む「社会福祉の研究課題」	秋山 智久	104号(2008年9月)

15分で読む経済思想

稲葉振一郎

106号(2009年9月)

十五分で読む日本近代史入門講義

加藤 陽子

107号(2010年2月)

15分で描くトラウマ・マップ

宮地 尚子

109号(2010年9月)

15分で読む歴史ドラマの背景

NHK大河ドラマと戦国史研究の進展

15分で読むイギリス

小和田哲男

110号(2011年6月)

十五分で読む大正百年

新井 潤美

112号(2012年4月)

十五分で読むイタリア現代思想

尾原 宏之

113号(2012年9月)

十五分でわかる仏教心理学

岡田 温司

114号(2013年1月)

十五分でわかる第一次世界大戦

葛西 賢太

115号(2013年4月)

15分で読む 現代民主政治の危機と「言葉のお守りの使用法」

片山 杜秀

118号(2014年8月)

15分で読む戦後七〇年 体験的読書案内

五野井郁夫

119号(2014年12月)

世界の戦後七〇年に際して

細見 和之

120号(2015年4月)

15分で読む アクティブラーニングとはなにか

「わかった」を引き出す授業を目指して

森 朋子

122号(2015年12月)

15分で読む 憲法と国家権力の三大失敗

高校生・大学生に伝えたい憲法入門

木村 草太 123号(2016年4月)

15分で読む アメリカ大統領選挙の過去と現在

阿川 尚之 124号(2016年8月)

15分で読む 15分で読むイスラーム

橋爪大三郎 125号(2016年12月)

15分で読む レジリエンスという交^{カル}差^{フル}路

「私の」から「私たちの」社会文化レジリエンスに向けて

阿部又一郎 126号(2017年4月)

15分で読む LGBT(Q)

セクシュアル・マイノリティと教育、学校

吉谷 武志 127号(2017年8月)

15分で読む マルクスの偉大さ

佐々木隆治 128号(2017年12月)

15分で読む 天皇の歴史

倉本 一宏 129号(2018年8月)

『シリーズ 精神医学の哲学』（全三巻）とその背景

住田 朋久（東京大学出版会 編集局）

二〇一八年九月、石原孝二氏のはじめての単独著、『精神障害を哲学する——分類から対話へ』（東京大学出版会）が刊行された。前任の編集担当の小暮明が石原氏に執筆を打診したのは二〇一一年四月。七年がかりの刊行となった。

この間、石原氏は『当事者研究の研究』（シリーズ ケアをひらく、医学書院、二〇一三年）を編み、英語で書かれた中村かれん『クレージー・イン・ジャパン——べてるの家のエスノグラフィ』（同シリーズ、医学書院、二〇一四年）を河野哲也氏とともに監訳し、また「シリーズ 精神医学の哲学」（全三巻、東京大学出版会、二〇一六年）をほかの編者とともにまとめあげた。私は「シリーズ 精神医学の哲学」の執筆が始まる二〇一五年四月ごろに編集に加わ

り、同年七月に三日間をかけて開催された草稿検討会から本格的に関わるようになった。

本シリーズの構成は以下のとおりである。

第1巻『精神医学の科学と哲学』

（石原孝二・信原幸弘・糸川昌成編）

第2巻『精神医学の歴史と人類学』

（鈴木晃仁・北中淳子編）

第3巻『精神医学と当事者』

（石原孝二・河野哲也・向谷地生良編）

編者の専門をみるだけでも、哲学、精神医学（分子生物学）、歴史学、人類学、精神保健福祉と多岐にわたって

いることがわかるが、総勢三四人のさまざまな分野の執筆者・訳者が携わっている。精神医学が近年の生物学的研究の進展や「リカバリー」の思想の展開などによって大きく変容するなかで、この精神医学という特異な領域にさまざまなアプローチで光を当てるシリーズである。

これらの書籍は、さまざまな共同研究プロジェクトの賜物である。ここでは石原氏の研究とそのネットワークの広がりを中心に、本シリーズの背景やその後の展開について紹介する。

哲学拠点「UTCP」での研究会

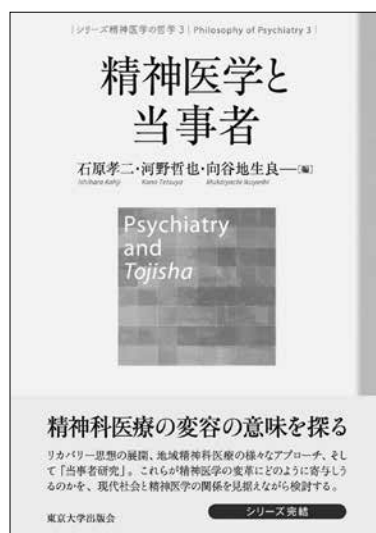
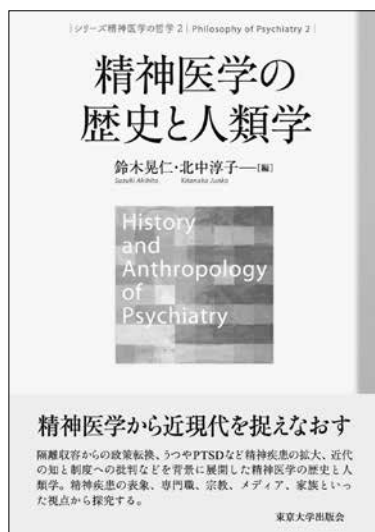
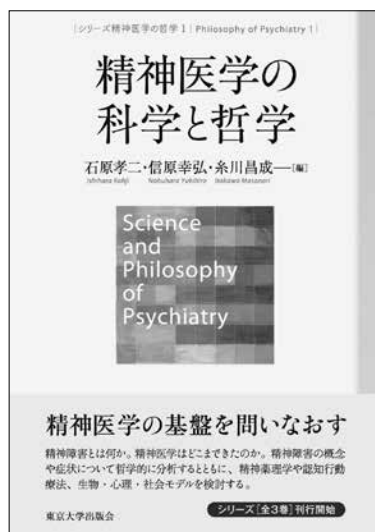
石原氏はハイデガーと近現代哲学に関する博士論文を書いたのち、二〇〇〇年代に科学技術論を中心に成果を公刊してきた『科学技術倫理を学ぶ人のために』(共編、世界思想社、二〇〇五年)、北海道大学科学技術コミュニケーション・養成ユニット(CoSTEP)編著『はじめよう! 科学技術コミュニケーション』(編集委員、ナカニシヤ出版、二〇〇七年)、『科学技術倫理学の展開』(共編、玉川大学出版部、二〇〇九年)。現在では障害の哲学や精神医学の哲学を中心に取り組んでいる。

る。

いまから一〇年前に東京大学に着任する前の北海道大学在任中からも、石原氏はさまざまな研究プロジェクトに関わり、多くの研究会などを主催していた。そしてウェブサイトでそれらを告知するとともに、その記録を一覧にまとめていた。書籍や論文の一覧をウェブサイトに掲載する研究者は当時も珍しくなかったが、主催した研究会の情報をリストアップしている例はそれほど多くなく、私も石原氏のそうしたウェブ上での発信を遠くからながめていた。そして二〇〇六年に北海道大学を訪れた際、石原氏がデンマークから研究者を招いて主催したセミナーに参加することができた。

東京大学大学院総合文化研究科・教養学部に着任して以来、石原氏の研究プロジェクトの拠点となったのが、UTCP(東京大学共生のための国際哲学研究センター(現在の名称)である。そこで石原氏は、冒頭に挙げた編著やシリーズの執筆者を含む多くの研究者を招いて、次々と研究会を開催していった。それらの記録はUTCPのウェブサイトで閲覧できる(<https://utcp.c.u-tokyo.ac.jp/>)。

そのなかでも二〇一〇年から開催された「コミュニ



- 「シリーズ 精神医学の哲学」(全3巻) 本体価格 各巻4800円
- 『1 精神医学の科学と哲学』(石原孝二・信原幸弘・糸川昌成 編)
- 『2 精神医学の歴史と人類学』(鈴木晃仁・北中淳子 編)
- 『3 精神医学と当事者』(石原孝二・河野哲也・向谷地生良 編)

ケーションとリハビリテーションの現象学」研究会（副

題は「当事者研究、理論研究、臨床研究、支援技術開発をつなぐ」や「当事者研究と現象学」、そして討論会「当事者研究の現象学」の共同研究者や講演者は、『当事者研究の研究』やシリーズ第3巻『精神医学と当事者』でも中核を占めている。たとえば、一つ目の研究会には、共同研究員として綾屋紗月氏や熊谷晋一郎氏（ともに東京大学、二人の共著に『発達障害当事者研究——ゆっくりしていねにつなぐ』）『医学書院、二〇〇八年』、熊谷氏の単独著に『リハビリの夜』（医学書院、二〇〇九年）が参加している。また、『当事者研究』が始まる舞台となった北海道の「浦河べてるの家」の向谷地生良氏（北海道医療大学、技法以前——べてるの家のつくりかた）（医学書院、二〇〇九年）もこれらの研究会に何度も招かれている。なお、これらの研究会の運営には、医学書院の編集者、白石正明氏の協力もあったという（『当事者研究の研究』おわりに）。

「精神医学の科学哲学——精神疾患概念の再検討」

本シリーズの直接のベースになったのは、二〇一二

年から四年間にわたって進められた科学研究費補助金のプロジェクト、「精神医学の科学哲学」である。石原氏が代表を務めたこのプロジェクトには、哲学者や精神科医、歴史家や人類学者、そして精神障害の当事者に関して研究や実践を行っている研究者などが参加した。こうした布陣が、本シリーズの構成に反映されている。

なかでも、第2巻として歴史と人類学が含まれたのは、幅広い学問分野によって精神障害を探究するというこのプロジェクトの狙いがよく表れている。この巻の編者となったのは、医学史家の鈴木晃仁氏（慶應義塾大学、*Madness at Home: The Psychiatrist, the Patient, and the Family in England, 1820-1860* (University of California Press, 2006)）と医学人類学者の北中淳子氏（慶應義塾大学、『うつ』の医療人類学）（日本評論社、二〇一四年）である。鈴木氏と北中氏は、以前から共同で研究会を開催することも多かったが、この研究プロジェクトに加わったことで、それらの成果を書籍として一つにまとめあげることができたとと言えるだろう。この巻では、イギリス、アメリカ、カナダの執筆者が参加していることを特筆すべきだろう（第1巻にはドイツの研究者の既発表論文の翻訳が収録されている）。

オープンダイアログ・ネットワーク・ジャパン

本シリーズを準備しているところからの石原氏の活動で大きなものは、「オープンダイアログ・ネットワーク・ジャパン」である。オープンダイアログとは、クライアントのもとに専門家チームがかけつけて対話をするという、フィンランド発のアプローチである。二〇一五年に設立したこの団体で、石原氏は斎藤環氏（筑波大学、『オープンダイアログとは何か』著・訳（医学書院、二〇一五年））らとともに共同代表を務めている。ここでは数百人が集まるイベントが次々と開催されている。

こまば当事者研究会、こまば当事者カレッジ

石原氏は先に紹介した研究会に加えて、最近では東京大学駒場キャンパスにおいて、独自の当事者研究の試みを実践している。その一つが毎月一回金曜日の夜に開催されている「こまば当事者研究会」である(<https://komaba-tojisha-kenkyukai.jindo.com/>)。これは二〇一四年か

ら水谷みつる氏とともに始めたもので、すでに五〇回を超えている。ここでは多様な困りごとを抱えた当事者が、「互いに弱さ（個人的な経験や悩み、困りごと）の情報を公開し合い、ともに研究を進めてい」る（会則より）。

さらに二〇一七年からは「こまば当事者カレッジ」という試みが始まった(<https://ucp.c.u-tokyo.ac.jp/projects/uchio/2017/komaba-tojisha-college/>)。この会では、「様々な障害をもつ当事者、当事者の家族、支援者、専門職、研究者、学生などが共に学ぶ場を提供する」（ウェブサイトより）。特徴的なのは、ゲスト講師によるレクチャーのあとの、「ワーク」である。これは小グループに分かれてディスカッションを行うというものである。さらに、毎月のこのレクチャー&ワークに加えて、障害研究ツアーや受講者企画、ポスター発表、交流会など、多彩なイベントが次々と企画されている。

『精神障害を哲学する——分類から対話へ』

このように研究・実践のネットワークが拡大しつづけるとともに、「石原氏の寄稿先も『精神看護』（医学書院）、

『精神科診断学』（日本評論社）、『臨床心理学』（金剛出版）などと拡大していった。

そうしたさまざまな媒体に掲載された論考の内容も含めて、この五年ほどの石原氏の精神障害についての探究をまとめたのが、冒頭に紹介した『精神障害を哲学する——分類から対話へ』である。三つの部ではそれぞれ、哲学史において狂気がどのように扱われてきたのか、精神障害の概念と分類はどのように変遷しているのか、そして入院ではない精神科医療にどのような可能性があるのか、といった問いが探究されていく。

本シリーズとこの単独著が、多くの方々の思索や実践に役立つことを願っている。

2018年研修旅行報告

大阪・京都

水口 大介(創元社)

澤畑 壘(東京大学出版会)

● 期日 2018年10月24日(水)～26日(金)

● 訪問先

「大阪」MARUZEN&ジュンク堂書店梅田店、紀伊國屋書店梅田本店、紀伊國屋書店グランフロント大阪店、梅田蔦屋書店、ジュンク堂書店大阪本店、紀伊國屋書店大阪営業部、旭屋書店外商部、未来屋書店りんくう泉南店、旭屋書店なんばCITY店、ジュンク堂書店難波店

「京都」大垣書店外商部、同志社生協書籍部今出川店、京都大学生協書籍部ルネ、丸善京都本店、ジュンク堂書店京都店、大垣書店イオンモールKYOTO店

創立50年という節目の年を迎えた人文会。今年の秋季研修旅行の訪問地は大阪と京都で、人文会50周年記念フェアを展開中の丸善京都本店をはじめ、一般書店や大学生協、そして書店外商部を訪問した。勉強会や見学といった形の研修はなかったものの、その訪問件数(16件)は例年にならないほど多く、そうした意味でも充実した研修旅行になったのではないかと思う。

参加者は会員社19名に加え、販売会社(大阪屋栗田トーハン、日販)の3名に同行いただき、総勢22名となった。以下、研修旅行の具体的な内容について報告する。

10月24日(水)

初日の訪問地は大阪で、大阪・梅田周辺の書店5店と、蛸池にある紀伊國屋書店大阪営業部に伺った。

まず訪問したのはMARUZEN&ジュンク堂書店梅田店。周知のとおり、日本最大の売場面積を誇る店舗で、その在庫量も飛び抜けている。おもな客層は30代、

40代とのことだが、学生らが専門書を探す姿もよく見られる。お店で対応してくれたのは、人文書担当の日野雅文さん。「店の特性上、既刊書の動きはよいが、新刊の初動がそれほどではない。既刊と新刊を一緒に買ってもらうことが今後の課題」と語っていた。

次に訪問したのは紀伊國屋書店梅田本店。申し分のない立地にある書店であり、どの時間帯でも多くのお客様で賑わっている。お客様の迷惑とならないよう人文会メンバーも慎重に店内を歩くなか、第三課長の百々典孝さんが棚の前で丁寧かつ熱心に話をしてくださった。「棚のキャパシティが大きくないので、どの本を置くかをきっちり考えていくのが今後の課題。大きくはないけどカッコいい棚を目指したい」とのこと。昼食をご一緒したこともあり、湯本正哉店長、吉原雅人仕入課長にもご対応いただく。

続いては紀伊國屋書店グランフロント大阪店を訪問。2013年にオープンした、JR大阪駅直結の複合商業施設グランフロント大阪内にあるお店である。対応してくださったのは、樋口正明店長と久保田雄一係長。商業施設の特徴もあって、おもな客層は20代から40代で、

人文書では心理学書が比較的好調だという。ただ、中高年のお客様の来店も増えているようであるし、久保田係長は事前アンケートで「中高年層をうまく定着させるために人文ジャンルの棚の充実を心がけていきたい」と言葉を寄せてくださった。直にお話ししていた際にも、「専門書はまだ売り伸びせる」と考えているのが伝わってきた。

その次は、これまたJR大阪駅直結の施設にある梅田蔦屋書店。オープンしてまだ3年の店舗だが、ここもまた利用客の非常に多い店舗である。平川淳一店長曰く、「オープン以来売上は伸びていて、とくにここ1年は客単価と書籍購入率が上がっている」。そんななかで、人文書の伸長に大きく貢献してくれているのが、コンシエルジュの三砂慶明さんだ。フェアやイベントなどを継続的に企画していて、現在は11の出版社との共同企画「読書の学校」が話題を呼んでいる。出版社の営業担当者やほかの書店の人文担当者にも積極的に質問をぶつけていき、何でも吸収しようとするその姿勢には頭が下がる思いだ。

大阪・梅田周辺の締めくくりとして、ジュンク堂書店

大阪本店を訪問。大阪駅の南側に位置する大書店で、40代、50代のビジネスマンがおもに利用している店舗である。2017年に大規模な改装を行っており、その変わりように驚いた人文会メンバーもいたようだ。応対してくれたのは、小笠原準店長と、人文書担当の松谷明さん、日景智子さん。お話しするなかで、広大な人文書の棚を維持していくことのむずかしさと楽しさが窺えた。改装後に大きなフェア棚もできたので、そちらの企画も募集中とのこと。

ここで大阪・梅田を一時離れ、阪急線で蛍池に。紀伊國屋書店大阪営業部を訪問する。外商部としては繁忙期であるにもかかわらず、大阪第一営業部の増井和久部長、第二営業部の出口優夏さんらが快く対応してくださった。打ち合わせでは、営業エリアやおもな顧客などを伺うとともに、最近の図書館の状況や図書購入率などについて教えてもらう。また、出口さんからは人文会の施策に対する一案もいただいた。対応可能かどうか、引き続き検討していきたい。

その後は梅田のホテルに戻り、19時からの懇親会に備える。懇親会には、訪問書店の店長や人文担当者だけで

なく、大阪屋栗田営業本部、トーハン大阪支店、日販大阪支店のみならずにもご参加いただく。和気あいあいとすると同時に、今後の人文書の扱いについて真剣に議論し、この会もまた非常に有意義なものになったのではないかと思う。

10月25日(木)

研修旅行2日目。朝一番で旭屋書店外商部を訪問した後、未来屋書店のある泉南に向かい、最後は難波にある書店2店に伺った。

旭屋書店外商部では、前日に懇親会にも参加いただいた林秀記ゼネラルマネージャーから歓待を受けた。営業エリアや営業先を教えるとともに、日頃どんな仕事をしているのか説明していただく。また、山村高司課長からは人文会各社にご提案も。対象エリアで大きな力を持っている当外商部だが、長年勤めている外商部員が時間をかけて得意先としっかり関係を築いているからこそ、そうした大きな力を持つことができるのではないかと、話を聞いていて思い知らされるようであった。

続いて未来屋書店りんくう泉南店を訪問。人文会は当

店と、商品部の牛久保力生さんを介してオープン前から深い関係がある。未来屋書店が専門書担当者の育成を進めていることもあって、今回の訪問に先立っては「担当者にビシバシ教えてほしい」というリクエストも頂戴した。そして実際の訪問時には、人文書担当者の山本成美さんが人文会メンバーからいろいろ話を聞き出していたので、その成果はあったのではないかと思う。なお、お店自体の認知度もさらに上がってきているようで、前年のグループ訪問時よりさらに多くのお客様がいたように感じた。

その後は難波に移動して、まずは旭屋書店ならばCI・TY店へ。北川英樹店長と人文書担当の池上かおりさんが対応してくれた。駅近くの店ゆえビジネスマンの利用が多いが、ファッションビル内の店舗でもあるので女性客も少なくないようだ。人文書で好調なジャンルは精神世界と心理学。池上さん曰く、「いまは手に取りやすい商品が売れているが、いずれは硬い専門書も売れるようにしたい」。

難波ではジュンク堂書店難波店も訪問。2016年のジュンク堂書店千日前店の閉店とあわせて、レイアウト

トを変更するとともに棚を2段高くした同店。そびえるようなその棚を前にして、改装後に初訪問した人文会メンバーは唸り声を上げていた。応対してくれたのは、人文書担当の杉澤敦子さんと岩崎翔さん、そして福嶋聡店長。店長おすすめのコーナーには硬派な本が並んでいて、そのラインナップを見た人文会メンバーからまたもや唸り声がかかる。同コーナーの本は売上も伴っているようなので、店長ファンのお客様は少なくないのだろう。

2日目の書店訪問を終えると、一行は宿泊地である琵琶湖畔の温泉旅館へ。同行いただいている販売会社の担当者3名を主役とした慰労会も賑やかに開催され、各人が親睦を深めあった。

10月26日(金)

研修旅行最終日は京都へ。京都市内の書店、大学生協、書店外商部を6軒訪問した。

朝一番で訪問したのは、北大路にある大垣書店外商部。外商部一課の池亀昌洋課長、森伊佐夫主任、そして京都府官報販売所の辻上知毅主任に対応いただき、外商部の新しい体制と仕事内容について伺った。一番の営業先は

大学とのことだったが、さすが地元書店の外商部だけあって、高校図書館へもリーチしているようです。人文会でここ2年間作成している「高校生のためのブックガイド」もすでに活用済みで、「版元をまたいでのカタログは使いやすい」という評価をくださった。

次は同志社生協書籍部今出川店を訪問。地下鉄烏丸線の今出川駅を出たところすぐに位置する同店は、その立地のよさもあって、学生と先生らでつねに賑わっている店舗である。人文書を担当している安井恭子さんと竹内綾子さんも、出版社の営業からつねに情報を引き出そうとしていて、その積極的な姿勢に好感が持てる。そんなお店なので、人文会メンバーから「もう少し長く滞在したかった」という声も出たほど。なお同店では、ちょうど法政大学出版局の出版社フェアを展開していたが、その動きもわるくないようだった。

続いて京都在校生協書籍部ルネを訪問。2016年にレイアウトを変更した同店は、以来、専門書を求める学生や先生のニーズに応えるべく品揃えを充実させている。応対してくださったのは、小島盛義店長と人文書担当の角谷昌紀さん。先生が校費利用の際に使っている

ツールや学生の教科書入手方法など、店長が紹介してくださった話の内容に驚かされた人文会メンバーも少なくともかったように思う。そして、同志社生協書籍部今出川店と同様、この生協店舗もまた人文会メンバーから評価が高かった。

昼食を挟んで河原町にある丸善京都本店へ。冒頭で述べたように、同店では人文会50周年記念フェアを展開中である。フェアを担当している星野耕士店長から途中経過の報告を受ける。人通りの多い場所での展開ということもあり、フェア・コーナーの前で多くのお客様が足を止めてくれているようだ。売上データを見ると、全体的にいい数字だし、多くのタイトルが売れていることがわかる。同店では、人文書担当の杉山英知さんとも挨拶。「ふだんなかなか会えない出版社のみなさんと会うことができて大変よかった」と感想をくださった。

次は徒歩でジュンク堂書店京都店へ。学生の利用者も多い丸善京都本店に対して、こちらのお店のおもな客層は中高年。それゆえ、近くにある店でありながら、売れる本、売れるジャンルが多少とも異なるのがおもしろい。応対してくれたのは、大寺伸二店長と馬渕衣里さん。



丸善京都本店での人文会50周年記念フェアのようす

中高年がおもな客層でありながら、心理や教育といったジャンルも人文では好調とのこと。馬淵さんからはもつとフェアの提案をしてほしいと打診を受ける。

最後の訪問は大垣書店イオンモールKYOTO店。2010年にオープンした同店だが、京都駅前にある在庫豊富な大型店として、専門書のお客様を徐々に増やしていつているようだ。担当の西尾実さんによると、ここ数年は人文書も動きがよく、とくに宗教などのジャンルが好調とのこと。赤井良隆店長、澤三枝さんにもご対応いただき、人文会一行は熱烈な歓迎を受けた。出版業界を盛り上げようという地元書店の前向きな話を聞くことができたのは、研修旅行の締めくくりとしてふさわしかったのではないかと思う。

人文会研修旅行3日間の行程は以上のとおりである。大阪と京都をおもに電車と徒歩で移動したこともあって、3日間の歩数は5万歩に及んだ。出版団体の研修旅行における歩数としては、おそらく最大クラスのものではないかと思う。体力的にややつらい側面もあったが、それだけ充実した、意義のある研修旅行だったと、旅行幹事



最終訪問地である大垣書店イオンモールKYOTO店にて

としては胸を張りたいところである。

お世話になった書店と大学生協のみなさまに心よりお礼を申し上げます。訪問時にお聞きしたことは今後にぜひ活かしたいと思います。

また、研修旅行に同行いただいた坂野上正臣さん（大阪屋栗田）、高須悠治さん（トーハン）、浅香健さん（日販）にも心より感謝申し上げます。みなさんと3日間行動をとるにも、たがいの距離を縮められることが、この研修旅行のもうひとつの財産ではないかと考えています。

ありがとうございました。

2018年特約店グループ訪問報告

山梨・長野方面

報告 吉岡聡(春秋社)

● 期日…2018年5月31日(木)～6月1日(金)

● 参加メンバー…吉岡聡(春秋社)、片桐幹夫(晶文社)、五月女公(日本評論社)、朝倉哲哉(法政大学出版社)、須藤圭(ミネルヴァ書房)

● 訪問書店(訪問順)

【山梨】 ジュンク堂書店岡島甲府店、朗月堂本店

【長野】 笠原書店岡谷本店、MARUZEN松本店、高美書店、信州大学生協松本書籍部、平安堂長野店、平安堂長野店外商センター、信濃毎日新聞長野本社

● 感想

甲信地区へは2012年以來の訪問で、前回何うことができなかった書店等を加えた2県2日間の行程と

なった。

初日、最初の訪問先は、甲府駅から徒歩10分ほど、老舗百貨店内のジュンク堂書店岡島甲府店。開店直後の訪問で、棚詰めがこれからのためか、やや棚がたついている印象を受ける。他方、定番書もPOP付きで展開してくださっているのが嬉しい。教育書が好調とのこと。駅周辺に専門書の在庫を豊富に揃える店は他になく、客層に新聞を購読している年配者が多いこともあり、書評掲載情報等をしつかり現場に伝えて販売に結びつけていきたい。

小雨が降り始める中、朗月堂本店へ移動。5月24日にリニューアルオープンしたばかりの同店は、外装・看板をしゃれた雰囲気に変更。店内についてはメインエントランスに「山梨の本と歴史」の棚を設置(9本6段)。文字通り郷土の本と歴史の本で構成される。また大型の催事コーナーを設け、「朗月堂10年ベストランキング」フェアが開催中であった。専門書を揃える郊外店でよく

耳にするが、同店でも企業に属する技術者の理工書購入が伸びているとのこと。しかし人文書に関しては新刊配本の少なさを感じた。販売力には期待できるため各社のフォローが求められる。担当を兼ねる店長によると、車で15分ほど行った甲府昭和のイオンモールがかなりの集客力があるようだ。その後、昼食を一緒にしたのちに山梨を離れる。

中央自動車道岡谷インターを降り、諏訪湖方面に約10分、市役所近くの商業施設集合地帯の一角に笠原書店岡谷本店は位置する。この時期の特約店グループ訪問・秋の全体研修を通じて初の訪問となる。入店してすぐのフェアコーナーにて、5月8日から6月30日(好評により期間延長)まで、自然の会・歴史書懇話会との3団体合同「専門書フェア」を大展開中であり、お出迎えくださった社長と店長に、毎年の開催について御礼を述べる。元棚では展開が難しい銘柄もこうした一等地なら反応も良いとのこと。別室へお通しいただき、さらにお話を伺っていく中で、人文書の棚構成(4本6段)と今後の棚づくりにについての意見交換をする。また外商方面では、より積極的に図書館等への働きかけを行うという力強い言葉

をいただく。残念ながら担当者にはお会いできなかったが、同店は専門書の充実に強い意欲を示されており、小会との協働の可能性を模索していきたい。

岡谷から松本へ向かい、松本駅周辺で最初に訪問するのは、2011年12月オープンのMARUZEN松本店。県内最大級の品揃えに圧倒されつつも、地下の人文書コーナーへ。ベテラン担当者の細やかな配慮による棚づくりに好感。最近好調なのは心理学書というのもあるのか、事前アンケートによると、知りたいキーワードに「公認心理師」を挙げるなど、人文書のトレンドへの目配せも欠かさない。歴史書の棚づくりが今後の課題だそう。新店長にもご挨拶。

初日最後の訪問先、高美書店へ徒歩移動。外商中心のことで、できあがったばかりの「高校生のためのブックガイド2018」の巡回依頼をする。店売では会員数社の新刊書籍も展開されていた。店長とお話の中で出た、信濃毎日新聞松本本社の新社屋「信毎メディアガーデン(2018年4月28日オープン)」までご案内いただき、3階テラスにて、引き続きお話を伺う。その後、近隣の書店担当者をお招きし、ささやかな懇親会を行い、

初日を終えた。

2日目。国宝松本城を横目に見つつ北上。ちょっとしたハプニングに見舞われつつも、信州大学生協松本書籍部に到着。信州大学全8学部のうち4学部があり、加えて全学部で1年生が松本キャンパスに通う。書籍棚は医学書が最も多く、訪問が生協がいばん入替前の時期と重なったせいか、人文書の在庫量は少なめ。担当者が出勤前につき、副店長にご対応いただく。新刊は担当者がBPOSかFAXで発注し、委託期限内に返品するように心がけている。外商活動はポスティングが中心とのこと。

松本から長野駅周辺に移動し、慌ただしく昼食。その足で、2016年11月に移転した平安堂長野店へ。現在は駅前の「ながの東急百貨店 別館シエルシェ」内にある。エスカレーターで2階に上がり、入店すぐの壁面には「歴史書クロスオーバー」と題した長野県の歴史を中心とした書籍が並び、壮観の一言に尽きる。ちなみに朗月堂本店の「山梨の本と歴史」の企画は、平安堂との交流から生まれたと、前日に訪問した際に店長が話されていた。閑話休題。長野店の人文書の蔵書量は移転前と



松本城

比べて減っているように感じたが、ベテラン担当者の深い内容理解を感じる棚づくり。現在の人文書の顧客層は40代男性とのことだが、より認知されていけば新しい層の読者も獲得できると思われる。平日昼間にもかかわらず店内は賑わっており、若い女性の来店も目立っていた。

行程上の時間的制限もあり、平安堂書籍事業部商品管理部の人文担当にも同店までご足労いただく。旧店舗（ウェストプラザ長野内）にも勤務されていた同氏からは、信濃毎日新聞で紹介されたものや、ご当地本は非常に反応がいい地域なので、チェーン全体での拡販のため、新刊刊行前にはぜひお声がけくださいとのこと。書評掲載等で火がつき、ロングセラーとなる書籍もあるので、そういうったものを多く育てていければと専門書を扱う会員社にはありがたいお言葉も。

その後、駅前から少し離れた平安堂長野店外商センターへ移動し、以前は各店で店長も務めたベテランのセクター長にお話を伺う。商圈は長野県内の高校15〜20校ほど。以前のように職員室に入って先生方と商談というのも年々難しくなっているとのこと。ここでも前出の「高校生のためのブックガイド2018」の巡回依頼をして、慌ただしく中心部まで戻る。

近年、特約店グループ訪問で新聞社を訪問する機会も少しずつ増えてきた中、今回は信濃毎日新聞長野本社へ打診したところ、ご快諾を得る。2週間ほど前に同紙を入手し、紙面の構成について等、各人が多少の予習をし

た上で門をたたく。会議室にて、編集局文化部長をはじめとした方々とのご挨拶もそこそこに、担当の編集委員より、書評面の編集方針についてレクチャーを受ける。特筆すべきは、文部科学省が「人文知」を軽視し始める中、同紙が人文書の紹介を強く意識している点である。若い読者に向けた書籍の掲載も積極的に行い、取り上げる本のジャンルや硬軟にも配慮を重ねて、バランスが取れた紙面づくりを心がけているそう。記者の方にもお話を伺い、有意義で貴重な交流の場となった。最後に取材用資料や出版社からの献本が保管してある書棚も見学させてもらい本社ビルをあとにした。

これにて今回の行程を無事にすべて終えたことになる。甲府から長野まで各地域の移動手段は車であり、総走行距離202kmの旅だった。移動に多くの時間を割かねばならず、各所を駆け足での訪問だったが、素晴らしい出会いに溢れた2日間となった。月末月初のお忙しいところ、必ずしも予定通りとはならなかった訪問を温かくお迎えくださり、本当にありがとうございました。お世話になった書店・大学生協・新聞社の皆様に心より御礼申し上げます。

静岡方面

報告 岩野忠昭（白水社）

● 期日…2018年6月14日（木）～6月15日（金）

● 参加メンバー…平石修（御茶の水書房）、藤井若菜彦（筑摩書房）、岩野忠昭（白水社）、登尾純一（平凡社）、水谷幹夫（未來社）

● 訪問書店（訪問順）…谷島屋浜松本店、谷島屋イオンモール浜松志都呂店、谷島屋ららぽーと磐田店、戸田書店藤枝東店、吉見書店外商部、大阪屋栗田静岡支店、戸田書店静岡本店、MARUZEN&ジュンク堂書店新静岡店、静岡大学生協書籍部静岡店、谷島屋マークイズ静岡店、マルサン書店仲見世店

● 感想

今年は、例年の2泊3日を1泊2日とコンパクトにしたグループ訪問。そのため東京から比較的近い地区への訪問となり、静岡県を西から東まで訪問した。

初日は一気に浜松へ。駅ビル内の谷島屋浜松本店を訪

問。谷島屋の旗艦店にふさわしい広さと物量に圧倒された。駅ビルなので通勤客を主としつつも、土日の客足も好調とのこと。その後、浜松地区にある谷島屋のイオンモール浜松志都呂店、ららぽーと磐田店を訪問。どちらも郊外のショッピングモール内の店舗で、人文書よりは



浜松で鰻重

児童書や実用書、コミック、学参が主力商品のようである。ただし、指導要領の改訂があった今年、教員の来店が伸び、教育書の売れ行きが好調だったとのこと。

東海道本線を乗り継ぎさらに東へ、次の訪問先は戸田書店藤枝東店。郊外のロードサイド店として、先に訪問した谷島屋よりはかなり小さい店舗ではあるが、人文書は必要十分な品揃えがコンパクトにまとまっている印象を受けた。こちらも教育および歴史分野が好調とのこと。

初日は静岡まで移動して宿泊。晩に静岡地区の書店の方々を招いてささやかな宴。なかなかの盛り上がりで初日の行程を終えた。

2日目はあいにくの雨。まずは静岡市街の古見書店外商部を訪問。公共図書館と小中学校や看護系の専門学校が主たる営業先であるが、高校生向けのブックガイドには関心を示してくれた。その後は大阪屋栗田の静岡支店を訪問し静岡地区の営業活動について話を伺った。

次に、大阪屋栗田と同じビルに店舗を構える戸田書店の静岡本店を訪問。文庫・新書なども気になる商品は人文書の棚でも展開し、棚づくりには相当な手間暇をかけている模様。勁草書房や筑摩書房、白水社、書物復権な

ど、専門書系のフェアも積極的に開催していた。

その後、小雨の中、徒歩でMARUZEN&ジュンク堂書店新静岡店へ移動。物量では静岡県内で圧倒的であり充実した棚ではあるが、少し前に人文担当者が退職したため、店長曰く、日常の棚管理に手が回っていないとのこと。これは昨今どの書店にも共通する問題であるが、同店のように規模の大きな書店だとより一層深刻なのかも知れない。

市街の店舗を駆け足で訪問した後は、静岡大学生協書籍部静岡店へ。広さは大きくないものの専門書もしっかり並べ、教員・学生のニーズに対応しようとしている姿勢が感じられた。書籍担当の方からはもう少し専門書を増やしたいという頼もしい言葉が聞かれた。

次に東静岡駅前の谷島屋マークイズ静岡店を訪問。駅前と呼ぶにはやや距離のある立地で、郊外型モールやロードサイド店と似たような客層とのこと。静岡書店大賞など積極的にアピールする姿勢が印象的だった。

東海道本線でさらに東へ。今回の研修旅行の最後の訪問先、沼津のマルサン書店仲見世店へ。駅前の老舗商店街に立地する多層階の路面店。しかし、郊外のショッピ

ングモールに客足を奪われているのか、商店街の活気が乏しかった。書店だけではなく商店街全体で客足を増やすような取り組みをしないと往時の賑わいを取り戻すのは難しいのではないだろうか。駅前書店としては十分な広さと在庫があるので、まだまだやれることはあるはずと感じた。

以上、1泊2日の駆け足で静岡県を西から東へ回った今回の研修旅行。お忙しい中、時間を割いて対応してくださった書店員の皆様、ありがとうございました。

水戸・宇都宮方面

報告 佐藤信治（大月書店）

● 期日…2018年6月28日（木）～29日（金）

● 参加メンバー…佐藤信治（大月書店）、乙子智（慶應義塾大学出版会）、森卓巳（青土社）、水口大介（創元社）

● 訪問書店（訪問順）

【茨城】川又書店エクセル店、蔦屋書店ひたちなか店、茨城大学生協水戸書籍部、川又書店県庁店

【栃木】下野新聞社、落合書店宝木店、くまざわ書店宇都宮インターパーク店、くまざわ書店宇都宮店、紀伊國屋書店宇都宮店、喜久屋書店宇都宮店、八重洲ブックセンター宇都宮パセオ店

● 感想

毎年恒例の特約店訪問であるが、実は人文会50年の歴史の中で、会として訪問をしていなかった県が今回訪問した茨城・栃木である。今回は1泊2日という短いスケジュールの都合上、両県の県庁所在地である水戸・宇都

宮の書店を中心に訪問する行程となった。

初日、上野駅から特急ひたちで1時間ほどかけ水戸へ。駅ビル「エクセル」内の川又書店エクセル店を訪問する。店舗リニューアルからちょうど丸3年。駅ビル内という立地ではあるが、郷土史・教育書などを中心に人文書もきちんと展開されている。店長の佐々木氏によれば、地元住民には昔から「専門書なら川又書店」というイメージは定着しており、その期待に応えられる書店を今後も目指していきたいとのこと。

水戸駅からレンタカーにて一路ひたちなか市へ。2012年にオープン、1800坪という北関東最大級の広大な敷地を誇る蔦屋書店ひたちなか店を訪問。周辺一帯が大規模なショッピングモールとなっており、土日は水戸・日立など周辺からも多数の来客がある模様。「目標は県内一番店、つくば市の大型店に負けない店を目指したい」とは、副店長の中村氏の弁。

そこから再び水戸市内に戻り、今回の行程では唯一の大学生協となる茨城大学生協水戸書籍部へ。雑誌・文庫などは必要最低限にとどめ、その分を専門書に割くなど、あまり広くはない売り場を効率的に運用している様子が

うかがえる。そこから初日最後の目的地である、茨城県庁庁舎に隣接する川又書店県庁店へ。ベテラン担当者の皆川氏が手がける人文書の棚は各社の常備を中心に質・量ともに充実。「県庁店」とはいうものの、客層は県庁関係者のみではなく、特に土日はファミリー層の利用も多いという。官公庁内と郊外型、両面の要素を併せ持つ他にあまり類を見ない書店と言えよう。書評コーナーには茨城新聞、レジ近辺にはJリーグクラブ「水戸ホーリーホック」関連商品を展開するなど、地域に密着した店舗づくりも印象的であった。

2日目は宇都宮市内へ。栃木県の地方新聞社である下野新聞社を訪問し、書評欄を担当する「くらし文化部」部長代理の荻原氏、同部記者の宇賀神氏から書評記事の作り方などについての話を伺う。書評は基本的には共同通信社から配信されている記事を使用。毎週日曜日に6点の書評を掲載。文芸・社会・ノンフィクションなど、ジャンルの重複ができる限りないように注意しつつ、栃木県出身・在住など、県にゆかりのある著者の本は大きく掲載するなど、地域色を出す工夫をしているという。最新の記事を拝見したが見開き2面を書評に割いており、

そのうち片面は書影をカラーで掲載している部分が印象的であった。

そこからレンタカーで北上し、落合書店宝木店へ。2階建ての店舗の2階に人文書はまとめられており、常備中心の展開。近隣の鹿沼市、さくら市などから車で来店するお客様もいるという。

そこからさらにレンタカーで移動。地元の百貨店「福田屋」が運営するショッピングセンター内のくまざわ書店2店舗を立て続けに訪問する。くまざわ書店宇都宮インターパーク店は敷地内に映画館などもある郊外型のショッピングセンター内という立地であり、客層は若いファミリー層が中心。インターパーク店よりも宇都宮駅近くに立地しているのがくまざわ書店宇都宮店。こちらはインターパーク店と比べ、地元住民の常連客中心で年齢層も高めだという。両店舗ともくまざわ書店全体で取り組んでいる書評掲載書コーナーが充実しており、特に宇都宮店は週刊ビジネス誌の書評記事についてもフォローしている点が印象的であった。

市内中心街に戻り、宇都宮パルク内の紀伊國屋書店宇都宮店へ。郊外のショッピングモールの影響で建物その

ものへの来客数が減ってきていることが売上にも影響しているという。パルクのすぐ向かいに位置する喜久屋書店宇都宮店は地下フロアの餃子専門店、ディスカウントストアのドン・キホーテなどが入店しているビルの上階6階は同店のコミック専門店である「漫画館」となっている。立地や漫画館併設などの関係で客層は若いのだと思っていたが、店長の福永氏によれば上階は年配の常連客の利用が多いようだ。在庫点数も非常に充実していた。

レンタカーを返却し最後の目的地であるJR宇都宮駅ビル内の八重洲ブックセンター宇都宮パセオ店へ。立地柄、客層の中心は通勤・通学などで駅を利用する方が中心であり、人文書は入門書を中心とした構成であった。

慌ただしい2日間であったが、道中トラブルもなく予定通りの行程をこなすことができた。月末のご多忙の中、お時間をいただいた訪問書店の皆様にごの場を借りて厚く御礼を申し上げます。誠にありがとうございました。

新潟方面

報告 片山伸治(吉川弘文館)

● 期日 2018年6月28日(木)～6月29日(金)

● 参加メンバー…志田則幸(紀伊國屋書店)、西野浩文(勸草書房)、澤畑壘(東京大学出版会)、田崎洋幸(みずす書房)、

片山伸治(吉川弘文館)

● 訪問書店(訪問順)

知遊堂三条店、知遊堂亀貝店、新潟大学生協書籍部、戸田書店新潟南店、新潟日報社、萬松堂営業本部、紀伊國屋書店新潟店、ジュンク堂書店新潟店、萬松堂古町本店、北書店

● 感想

人文会で新潟を訪問するのは、2014年秋の研修旅行以来となる。激動する出版・書店業界の動向において4年の月日は長く、今回の訪問でどのような変化がみられるものか興味深い。

朝からの雨模様は新潟に近づくにつれ新幹線の車窓を

濡らすようになり、降り立った燕三条駅では本降りとなっていた。まずは1店目の知遊堂三条店へと向かう。

県内に3店舗を構える知遊堂グループ最初の店で、他店舗同様にロードサイドでカフェを併設する路面店。広大な駐車場を親会社が経営するパチンコ店と共有している。近隣に競合店、ショッピングモールがないこともあり、売上はグループで一番を誇る。確かに平日の午前中としてはお客様の入りは良い。土日型でファミリー層を主な顧客とするが、人文書についても棚プレートが細分化され、きちんと管理されている印象を受けた。

レンタカーを走らせ知遊堂亀貝店へ。こちらのほうが坪数は大きいが、基本的な作りは共通している。棚づくりで「人文書販売の手引き」をご活用いただいていて、人文会としても冥利に尽きる思いである。やはり主要な客層はファミリー層で児童書の売場を拡大し好調であるとお話だが、人文書のフェアにも積極的に取り組む姿勢がありがたい。

そこからは数キロ離れた新潟大学生協書籍部へ向かう。人文系学科が充実する国立大学に相應しく比較的広い面積の店舗。人文書のご担当は昨年からとキャリアは

浅いものの、棚づくりや品揃えに意欲を感じられる。会として、または版元単位でも情報交換を密にしていければ、よりよい方向に向かうのではないかと思う。

さらに新潟駅に近づくとう田書店新潟南店に到着する。15年ほど前にオープンしたロードサイド店。その後近隣に開店したいくつかの書店の影響から大きく苦戦しているとのことだが、年配の男性客は多く人文書の可能性はまだまだあろう。近く人文担当が代わられるとのこと、人文会のツールをご活用いただければと思う。

次に訪問したのは新潟日報社。信濃川に架かる萬代橋近くに一際大きくそびえ立つ新潟日報メディアシップで、読書面や文化面を担当される記者のお二方にお話を伺う。県内で大きなシェアを誇り、書評記事の効果は絶大だが、その多くは共同通信の配信記事で、自社記事は郷土の本・著者を紹介するいくつかのコーナーのみ。だが新潟をテーマにした本、地元著者は積極的に取り上げたといったこと。本や出版に対する熱意を十分に感じ取ることができ、有意義な訪問となった。

この日の最後にお邪魔したのは、地場の書店として小・中・高・大学と広く外商活動を行っている萬松堂

営業本部。人文会作成の「高校生のためのブックガイド2018」をお送りすることを決める。また、スーパーマーケットなどを対象とした雑誌の卸部門もあり、全国規模で活動されていることを聞く。

晴天となった翌朝、開店早々の紀伊國屋書店新潟店を訪問する。新潟を代表する商業地区として賑わいをもせる「万代シティ」(「イ」はあえて小字を使用していない)のショッピングセンター内に位置する。人文書は入門的なものを中心に、学生など若者にアピールするように展開している。

そこから新潟駅反対側の南口に位置するジュンク堂書店新潟店へ向かう。2007年のオープン時には、この地域の読者には聞き馴染みのない書店だったことが想像されるが、専門書の圧倒的な品揃えで定着してきているのだろう。他書店でその影響について頻繁にその名前が挙がっていた。

なお、新潟駅は現在高架化工事を進めており、いずれ駅の南北を車で行き来できるようになるとのこと。人の流れにも影響を及ぼすことが予想される。

新潟の商業地域には、近年開発された万代シティとは

対照的に、かつて花街として栄えた古町という歴史ある繁華街がある。萬松堂本店はそこに長年構える老舗書店である。児童書の出版を始めたとのニュースが記憶に新しい。前回訪問時には2階が専門書コーナーになっていたが、残念ながら1階の棚数本に縮小されていた。場所は目立つ場所で動きはよくなっているので、置くべき本をより精査したいと話す。

訪問時の古町は、人通りはまばらで今ひとつ活気を感じることができなかった。だが自治体も手をこまねいているわけではなく、昨年この地区に区役所を移転したり、数年後に新しい複合施設の建設を予定しているなど、人を呼び込むためにさまざまな手を打っている。ぜひこの古町地区の活性化が進むことを期待したい。

最後に訪問したのは北書店。個性的な独立系書店としてメディアに多く取り上げられる店である。一人で切り盛りするのは、やはり古町にあり2010年に廃業した老舗書店、北光社の最後の店長。毎週イベントを開催したり、一箱古本市など街ぐるみのイベントに関わったりと非常に発信力がある。今後、人文会として、あるいは各社単位で取り組めることが出てくるだろう。

北陸を代表する都市である新潟は街の変化が激しく、それが書店の状況にも大きな影響を及ぼしていることがうかがえた。今後も引き続き注目していくべきエリアのひとつであることは疑い得ない。

最後にこの2日間、貴重なお時間を割いていただいたすべての方々に感謝したい。

ありがとうございました。そしてこれからもよろしく
お願い申し上げます。

人文会会員名簿

〒113-0033 文京区本郷2-20-7 みすず書房内

2018年12月現在

社 名	担当者	〒	住 所	電 話	FAX
大 月 書 店	佐藤 信治	113-0033	文京区本郷2-27-16 2F	3813-4651	3813-4656
御 茶 の 水 書 房	平石 修	113-0033	文京区本郷5-30-20	5684-0751	5684-0753
紀 伊 國 屋 書 店	志田 則幸	153-8504	目黒区下目黒3-7-10	6910-0519	6420-1354
慶應義塾大学出版会	乙子 智	108-0073	港区三田2-17-31	3451-6926	3451-3122
勁 草 書 房	西野 浩文	112-0005	文京区水道2-1-1	3814-6861	3814-6854
春 秋 社	吉岡 聡	101-0021	千代田区外神田2-18-6	3255-9611	3253-1384
晶 文 社	片桐 幹夫	101-0051	千代田区神田神保町1-11	3518-4940	3518-4944
誠信書房(休会中)		112-0012	文京区大塚3-20-6	3946-5666	3945-8880
青 土 社	森 卓巳	101-0064	千代田区神田猿楽町2-1-1 浅田ビル1F	3294-7829	3294-8035
創 元 社	水口 大介	101-0051	千代田区神田神保町1-2 田辺ビル	6811-0662	3219-7800
筑 摩 書 房	藤井若菜彦	111-8755	台東区蔵前2-5-3	5687-2680	5687-2685
東京大学出版会	澤畑 壘	153-0041	目黒区駒場4-5-29	6407-1069	6407-1991
日 本 評 論 社	五月女 公	170-8474	豊島区南大塚3-12-4	3987-8621	3987-8590
白 水 社	岩野 忠昭	101-0052	千代田区神田小川町3-24	3291-7811	3291-8448
平 凡 社	登尾 純一	101-0051	千代田区神田神保町3-29	3230-6572	3230-6587
法政大学出版局	朝倉 哲哉	102-0073	千代田区九段北3-2-3 法政大学九段校舎1F	5214-5540	5214-5542
み す ず 書 房	田崎 洋幸	113-0033	文京区本郷2-20-7	3814-0131	3818-6435
ミネルヴァ書房	三上 直樹	101-0062	千代田区神田駿河台3-6-1 菱和ビルディング2F	3525-8460	3525-8461
未 來 社	水谷 幹夫	112-0002	文京区小石川3-7-2	3814-5521	3814-5596
吉 川 弘 文 館	片山 伸治	113-0033	文京区本郷7-2-8	3813-9151	3812-3544

代表幹事 田崎洋幸
 会計幹事 平石 修
 書記幹事 片桐幹夫

《◎委員長(幹事) ○副委員長》

販売・企画委員会 ◎朝倉哲哉 ○森 卓巳・志田則幸・澤畑 壘・五月女 公・登尾純一・水谷幹夫
 調査・研修委員会 ◎水口大介 ○片山伸治・西野浩文・藤井若菜彦
 広報委員会 ◎岩野忠昭 ○乙子 智・佐藤信治・吉岡 聡・三上直樹

人文会ホームページ <http://www.jinbunkai.com/>

(各種情報／各社へのリンクはこちらからどうぞ)

「高校生のためのブックガイド」のご案内

人文会では会員各社の刊行物の中から、高校生に読んでもらいたい書籍を2点ずつ厳選し、「高校生のためのブックガイド」として1枚のリーフレットにまとめました。書店外商部様や書店店頭でのフェアなどで活用いただいております。

人文会 大月書店 徳富の本屋 紀伊國屋書店 愛徳書院大学出版会 協栄書院 春秋社 高文社 誠理書院 徳文社 新文社 協栄書院 東京大学出版会 日本評論社 自由社 法政大学出版会 みすず書院 ミネルヴァ書院 永春社 筑川弘文館

「ブックガイド 2017」

高校生のための

01. 本屋って何? NDC 024

02. 高校生のための東大授業ライブ 学園への招待 NDC 041

03. 高校生のための東大授業ライブ 学園からの挑戦 NDC 041

04. 「ポスト真実」時代のネットニュースの読み方 NDC 070

05. ジャーナリスト 後藤健二 NDC 070

06. 高校生のための心理学 NDC 070

人文会 大月書店 徳富の本屋 紀伊國屋書店 愛徳書院大学出版会 協栄書院 春秋社 高文社 誠理書院 徳文社 新文社 協栄書院 東京大学出版会 日本評論社 自由社 法政大学出版会 みすず書院 ミネルヴァ書院 永春社 筑川弘文館

「ブックガイド 2018」

高校生のための

01. 知のフィールドガイド 分断された時代を生きる NDC 002

02. プリズン・ブック・クラブ NDC 015

03. 知のフィールドガイド 科学の最前線を歩く NDC 041

04. 政治を動かすメディア NDC 070

05. 日本メディア史年表 NDC 070

06. 新哲学対話 NDC 100

目録のご案内

人文図書3分野の基本図書および最新刊を網羅した年度版の図書目録です。

●人文図書目録刊行会発行 A5判・平均200頁 頒価本体(各)286円



◆哲学・思想図書総目録2018－2019年版

約2,100点(131社)収載。

〔掲載分野〕哲学・思想一般/倫理学・人生論/美学/各国哲学
/現代哲学/宗教一般/宗教学 ほか

ISBN 978-4-915268-40-3



◆心理図書総目録2018－2019年版

約2,800点(96社)収載。

〔掲載分野〕心理総論/基礎心理/発達心理/教育心理/臨床心理/精神分析/精神医学/社会心理 ほか

ISBN 978-4-915268-41-0



◆社会図書総目録2018－2019年版

約2,400点(118社)収載。

〔掲載分野〕社会一般/家族社会/地域社会/産業労働/福祉・教育/社会問題/文化文明論/文化人類学/民俗学ほか

ISBN 978-4-915268-42-7

* ご注文は書店にお願いいたします。

●人文会

〒113-0033 東京都文京区本郷2-20-7(みすず書房内)

●人文図書目録刊行会

〒162-8710 東京都新宿区東五軒町6-24(トーハンビル内)

TEL 03-3266-9521(事務局)

「本のことは、やはり世界のことである」

私のティーアガルテン行

平出隆

「本」というメディアの激変を
生きてきた詩人の回想録

成長過程で出会った恩師や友人、刺激を受けた小倉の街、書店、映画館、詩との出会い、文学への目覚め、編集、印刷、製本、歌、野球——▼本体価格2700円＋税

紀伊國屋書店

出版部・東京都目黒区下目黒3-7-10
営業TEL03(6910)0519

近代社会が喪った
「雑」の魅力を語りあう

「雑」の思想

世界の複雑さを愛するために

高橋源一郎・辻信一 著

46判・1500円

既刊 弱さの思想 (5刷)

高橋源一郎・辻信一 著 1600円

「表現の自由」入門の決定版

「表現の自由」の 明日へ

一人ひとりのために、
共存社会のために

志田陽子 著 46判・1600円

東京文京 大月書店 電話03-
本郷2-27 3813-4651
otsukishoten.co.jp (税別価格)

慶應義塾大学出版会

<http://www.keio-up.co.jp/>

シリーズ「世界を読み解く一冊の本」

第1回配本

大槻文彦『言海』

——辞書と日本の近代

安田敏朗著



四六判上製/208頁

国語学者、大槻文彦が明治期に編纂した日本初の近代的国語辞典『言海』。大槻は『言海』を通して世界をどのように切りわけようとしたのか。辞書が社会的に果たした役割とともに描き出す。

◎2,000円

〒108-8346 東京都港区三田2-19-30 【価格税抜】
Tel 03-3451-3584 Fax 03-3451-3122

御茶の水書房

ウェーバーの宗教観

―宗教と経済エッセー―

岡澤憲一郎 著

菊判 二四〇頁 本体五〇〇円

『宗教社会学論集』に収録されている実質的な宗教社会学的研究を、エートスの視座から読み解き、再構成をする。

『資本論』の経営理論

―協業論と指揮論の構築をめざして―

藤原直樹 著

菊判 四八〇頁 本体八八〇円

『資本論』を再検討し、新しい研究成果を加味することによって、新たな基礎理論が展開出来るのではないかという一つの試み。

東京都文京区本郷5-30-20 ☎03(5684) 0751

吉本隆明全集

第17巻 1976-1980

未発表のフーコー宛書簡をはじめ、『悲劇の解説』『世界認識の方法』などの著作を収録。第18回配本。

本体価格 6700 円＋税

維新と敗戦

学びなおし近代日本思想史

国防、貧困、国のかたち、日本人らしさ……近代日本の超難問に先人たちは苦悩し答えてきた。23 人の思想家による日本思想史再入門。

先崎彰容

本体価格 2000 円＋税

晶文社

〒101-0051 千代田区神田神保町 1-11
Tel.03-3518-4940 Fax.03-3518-4944

2018-2019年版

哲学・思想図書総目録

哲学・思想一般 / 倫理学・人生論 / 美学 / 各国哲学 / 現代哲学 / 宗教一般 / 宗教学 ほか

心理図書総目録

心理総論 / 基礎心理 / 発達心理 / 教育心理 / 臨床心理 / 精神分析 / 社会心理 ほか

社会図書総目録

社会一般 / 家族社会 / 地域社会 / 産業労働 / 福祉・教育 / 社会問題 / 文化文明論 / 文化人類学 / 民俗学 ほか

◎A5判・平均200頁 ◎頒価本体各286円

人文図書目録刊行会

〒162-8710

東京都新宿区東五軒町 6-24

トーハンビル内

マンガーと手榴弾

生活史の理論

岸 政彦

人生と世界を架橋するために——新しい生活史の方法論へ向けた、深い思索と実践。

本体 2500 円＋税

社会制作の方法

社会は社会を創る。でもいかにして？

北田曉太

「社会秩序はいかにして可能か」をめぐる how の問いと what の問い。社会学の根本をめぐる問題を問い直す。

本体 2500 円＋税

#リパブリック

インターネットは民主主義になにをもたらすのか
キヤス・サステイン／伊達尚美（訳） 本体 3200 円＋税
SNS の浸透により危機に瀕する民主主義。正しく熟議を確保する方策とは？

はい 茅草

勁草書房

TEL 03-3814-6861

FAX 03-3814-6854

〒112-0005 東京都文京区水道2-1-1

<http://www.keisoshobo.co.jp>

創業百年
記念出版

佐藤 優 × 深井智朗

近代神学の誕生

シュライアマー『宗教について』を読む

シュライアマーはなぜいま読まれるべきなのか。神学とは何かをわかりやすく解説しつつ、彼の思想の独自性と現代性を説く。

定価（本体2000円＋税）

春秋社

東京都千代田区外神田2-18-6

☎ 03-3255-9611 FAX 03-3253-1384

<http://www.shunjusha.co.jp/>

【リニューアル】web春秋 はるとあき

<https://haruaki.shunjusha.co.jp/>

『戦場のコックたち』を超える衝撃!

ベルリンは 晴れているか

刊行即
重版

深緑野分

1945年7月、4カ国統治下のベルリン。恩人の不審死を知ったアウグステは彼の甥に卧報を届けるため陽気な泥棒と旅立つ。期待の新鋭、圧倒的スケールの書き下ろし長篇歴史ミステリ。



1900円

筑摩書房

営業部 03-5687-2680

* 定価は表示価格+税

<http://www.chikumashobo.co.jp/>

隔たりと政治

統治と連帯の思想

重田園江

規律社会の統治のテクノロジーを鋭く読み解きながら、紛争や暴力を治め、分断に抗う連帯の可能性を構想する試み。

2800円

退行の時代を生きる

ジグムント・パウマン

人びとはなぜレトロピアに魅せられるのか
前途が見えず、過去に憧憬をいだく時代に、わたしたちはどこに向かうのか。
社会学の巨人が遺した最新の言葉

2000円

折口信夫的思考

越境する民俗学者

上野誠

万葉文化論を提唱する著者が、民俗学のバイオラの一人にして、はじめて『口訳万葉集』をつつた折口信夫の実像に迫る。

2800円

青土社

東京神田神保町 ☎03-3294-7829
<http://www.seidosha.co.jp/> (価格税抜)

宇野重規

未来を はじめる

「人と一緒に
いること」
の政治学

早くも
話題沸騰



友だち同士から国際政治まで、互いに異なる人たちがどうしたら一緒に暮らしていけるのか。政治の根本を考え抜く5つの講義。

本体1600円+税

2018年9月刊

東京大学出版会

〒153-0041 東京都目黒区駒場4-5-29
TEL 03-6407-1069 FAX 03-6407-1991
<http://www.utp.or.jp/>

創元社

本の虫の本

《本に埋もれて生きる》 林哲夫、能邨陽子、荻原魚雷
田中美穂、岡崎武志(著)
赤井雅佳(イラスト)

自他ともに認める「本の虫」5人衆が、本にまつわるキーワードを自由気ままに解説。本の世界を縦横無尽に楽しむための案内書。

四六判・並製 352頁 定価(本体2300円+税)

デイヴィッド・トリック(著)／赤尾秀子(訳)

書物のある風景

——美術で辿る本と人との物語

古今東西の本のある風景を捉えた300点超の芸術作品をすい
ルカラーで収録。普遍的な本と人の姿を見出すことができる一冊。

A5判変型・上製 352頁 定価(本体4200円+税)

大阪市中央区淡路町4-3-6

☎06-6231-9010 Fax06-6233-3111

千代田区神田神保町1-2 ☎03-6811-0662

言葉のこす

平凡社の新シリーズ、語り下ろし自伝。
偉大な先輩たちが未来に贈る、生きる知恵。

金子兜太 私が俳句だ

野見山暁治 人はどこまでいけるか

中村桂子 ナズナもアリも人間も

大林宣彦 戦争などいらない未来を
紡ぐ映画を

◆上製 B6変型判 112頁
各巻本体1200円＋税 以下、続刊

平凡社 〒101-0051
東京都千代田区神田神保町3-29
tel 03-3230-6573 fax 03-3230-6587
http://www.heibonsha.co.jp/

セックスワーク・スタディーズ

—当事者視点で考える性と労働

SWASH 編 ◎1900円＋税

性のセと労働Wのセをめぐる現場で蓄積されてきた知をもとに、セックスワーク研究を切り開くはじまりの一冊。



布コラーージュ法の世界

—回復への途を紡ぐ物語—

藤井智美 著 ◎2400円＋税

老人から子供まで、手近な材料で双方が癒され回復の途へと誘われる画期的な手法をふんだんな事例をもとにわかりやすく紹介する。



日本評論社

〒170-8474 東京都豊島区南大塚3-12-4
TEL: 03-3987-8621 https://nippon.co.jp

法政大学出版局

http://www.h-up.com/

《サビエンティア 54》

差別はいつ悪質になるのか

D.ヘルマン 著／池田 喬、堀田義太郎 訳
差別という言葉によって、本当は何を理解しているのか、行為や言動の何を問題として道徳的な評価をするのか。その評価の根拠は何か。 3400円

《叢書・ユニベルシタス 1083》

個体化の哲学

形相と情報の概念を手がかりに
G.シモンドン 著／藤井千佳世 監訳
近藤、中村、ステリン、橘、米田 訳
技術と生命の問題系で世界的に注目される哲学者の著。物理・生物学、情報科学等の事例から「個体とは何か」という伝統的問いに迫る。 6200円

〒102-0073 東京都千代田区九段北3-2-3
☎ 03 (5214) 5540 / 表示価格は税別です

デリダと死刑を考える

高桑和巳 著

【新刊】哲学者デリダによる「死刑存廃論の脱構築」をもとに、死刑制度について考えるためのハンドブック。 本体価格3000円＋税

ジャック・デリダ講義録

死刑 I

ジャック・デリダ 著

残酷さ、血、例外、恩赦、主権……死刑をめぐる概念を読む。みなおしてゆく。高桑和巳訳 本体価格7500円＋税

デリダ伝

膨大な資料とともに「デリダの生涯と思想をリーダーブルに物語る。原宏之、大森晋輔訳 本体価格10000円＋税

ブノワ・ペーターヌ 著

白水社

東京都千代田区神田小川町3-24
tel.03-3291-7811 / fax.03-3291-8448

2018年12月25日発行 年3回発行 第130号

発行所 人文会

〒113-0033 東京都文京区本郷2-20-7 みすず書房内

編集協力 アジュール・プロダクション

印刷 中央精版印刷株式会社

〈非売品〉